

「居心地」は、「そこに居る」+「心地」である。

ひとはいつもどこかにいる。すると、「そこに」居て、「心地」「つまり」ころがある。ひとはどこかにいないことはないのだから、当たり前のこと。至極単純。ただし、ころがあれば、であるが。

この一見、何の変哲もなく当たり前にみえること、が「居心地」のベースとしてあり、「心地」が、どーんと、核のように居座っている。

実はその「心地」の魅力的なヒントが古語辞典に隠されている。

「心地(あるいは「心ち」「こちち)」「は古い日本語で、文献ではもつともふるく残るのが、「……恋する心地しはし休めて……」と書かれた(「心ち」の表記もあるが)紀貫之の『土佐日記』のくだりである。のちの源氏物語

「心地よさ」の時代

「居心地」は人によってちがいがい、さまざまである、とよくいわれる。広大な宇宙に散らばる無数の星のごとくにきらめき、それぞれが独立し、ひとと違って、最後の皆ともいふべき、かけがえのないものとさえおもわれる。

しかも、それは他人様には決してわかるものではなく、わが身自分のことなのだから、自分だけがわかる、と。

そうであるから、てんでんばらばらの状態で、まことにとらえどころなく、それでも、それぞれがそれでいいではないか、で話は閉じることになる。

しかし、それでも「居心地」ってなんだろうと問いたくなる。

なにか、個別のさまざまな「居心地」をつらぬく、そこに共通項はないものか。あるいはまた、わずかでもたよりとなる、座標軸のようなものはないものか。

その手がかりをもとめて、まずひとつ、言葉から。

「居心地」のもつとも簡単な説明は、国語辞典によれば、

「そこにいるときのころもち。すみ

などでは、しきりにつかわれる重要語である。

それら「心地」とは、

「類義語コロロが積極的に対象に向かう意向・意志などの働きに中心があるに対して、事態からその場で受ける気分・感じ」(『岩波古語辞典』)

という伝統を兼ね備えているものだった。「事態から、その場で受ける気分・感じ」とはいえ、「心」の積極性にたいして、「心地」には、「受ける」という一種の「受動性」がもともとあるという。

とうぜん、この「受動性」が「居心地」にもスライドしてあるのだ、と考えるのは容易ではないか。

「心地」は「心地よさ」としてはつきりと、時代のうねりとともにやってきた。それに引き寄せられるかたちで「居心地」が続いた。

一九九〇年、なかなか面白い新聞記

え・安原喜秀



事に遭遇する。

先進国 フランスでは、女性誌「ビバ」二月号が五年後の女性の動向について、職業、趣味、生活三つの領域の予測を上げているという。(日経新聞)

その紹介には、

「先進工業国の八〇年代は、ストレスという言葉なしには語れない。フランス女性も、八〇年代にはストレスでず

たずたになつた。九〇年代を前にして「心地よく生きたい。そして、その心地よさを他の人たちと分かち合いたい」という声、彼女達の中ではたかまってきた。

とあった。この声をもとに同誌はフランス女性の生活の予測をしたという女性に、「心地よさ」が時代とともにやってくる、という見通し。

フランス誌の予測どおり、「心地よさ」の厳密な言語のちがいが、お国事情のちがいが、があるにもかかわらず(奇しくも、世界的な潮流のごとく、わが国でも九五五年あたりから、「心地よさ」が少しずつ、おもてにできるようになった。その仲間のような言葉、「快い」や「快適」、「いや(癒)される」や「くつろぐ」があり、そして「いいこち」が加わった。

この事態の背景は、「受動性」とも関連づけられるように思われる。それについては、またあらためて。